

中部ひと未来

「絞りは民族が育てた素朴なデザイン。地のおいがする」。昨年十一月末に名古屋市中で開かれた国際絞りの会議に実行委員として参加した久野剛資は、十六カ国の技術者との交流で絞りにへのこだわりを強め、創作への自信を深めた。

名古屋市緑区の有松・鳴海地区は、旧東海道筋に江戸時代そのままの白壁の商家が残る国内一の絞りの産地だ。三百年の歴史が息づき、久野は周囲から「おっ、四代目」と呼ばれ、絞りに染色業を営む若手後継者の一人。一人一芸の専門技法が支配する産地において「絞りはアート」と、伝統に新たな息吹を吹き込む。

絞りの産地は六〇年代後半から安価な労働力を求めて韓国、中国への分業が急速に進んだ。産地問屋を核に近隣の農家の副業が支えた

久野 剛資 絞り染めに「アート」の新風

『伝統守るだけでは閉鎖的なまま』



【くの・つよし】 1955年名古屋生まれ。久野染工場経営

駆使する。水をまくジョロ口を使った流し染め、スプレー、スボンジ、ハケ、のり……。眼を見つけてはホームセンターで、新たな小道具を探し求める。

「消費者との出会いも大切にしたい」。自宅の仕事場を開放した「絞りの教室」は十一月目を迎える。三十、四十代の主婦を対象に絞りファンを育て、久野の感性を磨くアンテナ役も果たす。弟子入り志願も舞い込む。コンピュータの世界から転身した女性、着物に魅せられた米国人青年が久野の仕事仲間に加わった。

絞りは高級洋服のイメージが強く、とすれば日常の生活とは無縁な世界。「新しい分野を切り開くにはファッション・インテリア、アートの三本柱が欠かせない」。アジア、アフリカ、欧米から参加した国際会議は有松の絞りを世界に発信する契機となった。「海外から引き合いがあり、今秋には出品したい」。久野は伝統工芸の産地から世界の表舞台への躍進台に立っている。(敬称略)

仕組みは崩れ、職人の高齢化、後継者難、技術の空洞化……。こうして閉そく状況を久野は肌で感じた。「絞りの商家の遺産」でもある足踏みし閉鎖性から抜け出せない」と、将来への危機感が創作意欲を駆り立てる。職人芸をいち早く機械化、不可能といわれたボリ

エステル絞りの製品化にも挑んでいるという。

久野は伝統とは異なる小道具を